

令和5年度秋田県総合政策審議会
第1回 観光・交流部会
(議事要旨)

1 日時 令和5年5月24日(水)午後3時10分～午後5時

2 場所 秋田地方総合庁舎4階 402・403会議室

3 出席者(敬称略)

【観光・交流部会委員】

丑田 俊輔・・・ハバタク株式会社代表取締役

齋藤 あゆみ・・・旅のわツアー代表

佐々木 亜希子・・・能代市市民活動支援センター長(部会長代理)

吉澤 清良・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授

(部会長)(オンライン参加)

【県】

観光文化スポーツ部 次長 岡部 研一

次長 川村 潤

次長 佐々木 重夫

インバウンド推進統括監 益子 和秀

関係各課長 等

4 あいさつ

○岡部観光文化スポーツ部次長あいさつ

委員の皆様においては、御多忙の中、当部会に出席いただき感謝する。

当部会では、観光を軸とした食・文化・スポーツ・交通の連携による交流人口の拡大を目指す戦略を所管しており、その施策の推進に当たって皆様から御意見いただくこととしている。

今年度の予算編成においては、昨年度いただいた提言をしっかりと反映をさせており、こうした事業をベースとしつつ、後ほど説明するが「冬季誘客の促進」や「高付加価値化」、「デジタル化」、「若者定着・女性活躍」の四つを柱としながら取り組んでまいりたいと考えている。

現状、コロナ禍を脱し、観光需要が伸びてきており、各地でも誘客に向けた観光地づくりや施設整備に取り組んでいるが、一方で人手不足への対応という課題も生じてきている。

令和6年度当初予算に向けて、いただいた提言を生かしてまいりたいと考えているので、委員の皆様には、積極的に発言いただき、様々なアドバイスをしていただくようお願い申し上げます、私からのあいさつとする。

●吉澤部会長あいさつ

本日、大分県の別府市、立命館アジア太平洋大学から参加している。昨年度は、公益財団法人

人日本交通公社の研究者として参加をさせていただいていたが、縁があってこの4月から大学の方に出向という形で着任した。

イメージとしては国際教養大学に近いと思うが、学生数は約6,000人おり、その半分は留学生、約110ヶ国の地域から集っていて、インターナショナルなところが特徴である。

このように立場が変わり環境も変わったので、異なった視点からこの部会での役割を果たしていきたいと思っているのでよろしくお願いします。

5 議事

(1) 令和5年度観光・交流部会の進め方について

小松観光戦略課長

(部会のスケジュール等について、資料1により説明)

●吉澤部会長

ただ今の説明に、質問はあるか。

(なし)

(2) 「新秋田元気創造プラン」戦略3の推進に係る令和4年度の主な取組について

小松観光戦略課長

(観光文化スポーツ部 今年度の主な取組について、資料2-1により説明)

碓石道路課政策監

(建設部 今年度の主な取組について、資料2-2により説明)

古山港湾空港課長

(建設部 今年度の主な取組について、資料2-2により説明)

●吉澤部会長

主な取組について説明いただいたが、具体的な提案についてはこの後の議事で伺うので、まずは質問や確認があればお願いします。

●佐々木委員

滞在型・体験型観光の推進の一番最後に、洋上風力発電を活用した新たな観光資源の磨き上げとあるが、現在調査しているなどの動きはあるか。

小松観光戦略課長

能代市や秋田市では、関連する事業者の視察が多いことを把握している。

また、地域の観光協会などでもツアー造成を検討しているなど、様々なことにチャレンジしようとしており、県としてはこうした地域の状況をしっかり伺いながら、市町村と共に商品化に向けた仕組みづくりを検討している。

●佐々木委員

以前、能代市長が洋上風力発電を観光資源にするのはどうかという発言をしていたと記憶している。能代市では、ホテルの大多数が工事関係の事業者で埋まっていて、観光に来ても泊まれない状況が続いており、これからも観光客にとっては難しい状況が続くのではないかと思う。

一方、様々な業種で人手不足と言われており、適材適所のような調整が可能であれば解消の一つの手段となり得る。

洋上風力発電は、他の地域にはない特色であるので、観光と上手く組み合わせることができれば差別化が図られる。景観などの問題もあるが、プラスに考えて活用していくべきであり、市や観光協会、DMOなどの関係者間では観光資源化の動きが出ているので、県の方でもサポートしていただきたい。

●吉澤部会長

風力発電は、クリーンエネルギーの一つであって、SDGsなどの大きな方向性にも合致しており、産業観光という形で使うことができる。

こうした資源は、教育旅行などがターゲットとなり得るが、佐々木委員が言うとおおり、地元を巻き込んでいかなないとなかなか前に進まないのサポートが必要である。

□小松観光戦略課長

観光への活用については、教育現場でのニーズも高いので、環境教育の視点も含めて、教育旅行をターゲットとして進めていくことを検討している。

また、視察への対応についても、無償で引き受けている事例もあると聞いているが、ツアーのような形で宿泊もしっかり受け入れつつ、地域で稼げる仕組みを作りながら継続した取組となるよう関係者と協議してまいりたい。

●齋藤委員

繁忙期と閑散期の割合について、入込客数や宿泊者数が伸びる要因は、イベントやお祭りが関係していると思う。夏期と閑散期である冬期間のイベント数を比較できる統計はあるか。

□小松観光戦略課長

明確に比較ができる統計はないが、一般的に夏場は竿燈まつりを始めとして、全国から多くの観光客が来るイベントがあることに比べ、冬期のイベントは規模が小さいため、繁閑差が生じる要因となっていると思われる。

なまはげ柴灯まつりやかまくらなどの小正月行事のイベントは、県外からの誘客が見込める魅力は十分にあるので、丁寧な情報発信に努めてまいりたい。

●齋藤委員

ぜひ、人を呼び込めるイベントの開催やイベントの情報発信に取り組んでいただきたい。

●吉澤部会長

同じ観光資源であっても、例えば、森であれば秋の紅葉時期に比べて、冬は相対的に魅力が下がるので、新たに付加価値を高めるためのイベント開催であったり、閑散期における観光客の属性データなどをより丁寧に分析するなどして、誘客方策を検討していくことが大切である。

●丑田委員

DMPの実証エリアの拡大は非常に良い方向であると思うが、男鹿エリアでの実証事業を通じて、その手応えや次につながる取組などがあれば教えていただきたい。

□小松観光戦略課長

男鹿のデータについては分析中であるが、宿泊事業者からは顧客データを効果的に把握できたことにより、こういった層をターゲットにするべきかという整理が可能となったなどの意見がある。

また、県では収集したDMPデータと、東北観光推進機構で運用している東北観光DMPに蓄積されているスマートフォンの位置情報を活用した流動データの分析を行っており、いずれは観光エリアでのプロモーションに活用するなどの取組につなげていきたいと考えている。

効果的な活用にあたっては多くのデータが必要であるため、今年度は実証エリアを更に拡大し、新たに鹿角市と仙北市においてもデータ収集をする。

●吉澤部会長

DMPに参画する事業者を増やし、データを的確に収集していくことは重要であるので、今後とも進めていただきたい。

(3)「新秋田元気創造プラン」戦略3の推進に係る施策の提言について

●吉澤部会長

別府でも今年のゴールデンウィークは観光客が戻りつつあるという話を聞いている。

皆様のそれぞれの地域にあっては、人の流れ、現状がどうなのか、感覚的なことでも結構なので、ぜひ教えていただきたい。

●佐々木委員

個人的には外国人観光客にあまり会っていないが、クルーズ船の映像を見るとかなりの方が来ていると分かるので、増えてきているのだろうと思う。

以前、徳島県の祖谷に寄ったとき、秘境の地にも関わらず、多くの外国人がいて驚くべき光景であった。いろいろな分野において、外国人を誘致する仕組みがあるのだろうと思う。

秋田にも秘境や美しい風景の場所はたくさんあるので、効果的にPRする方法はあるのではないかと。知事は、秋田は食も豊かであり、有事の際も生き残れるサバイバルに強い国と言っていたが、不便なところを上手にPRすることも有効であって、面白くポジティブな方向に発信すると、多く人が訪れ、交流人口の拡大にもつながっていくと思う。

人材不足の課題については、観光のみならずこの業界も厳しい状況。人口減少が続いている中において、人が足りていない地域と充足している地域などの偏りがあり、循環していないようにも思える。

人材不足への対応に当たって、AIを始めとしたデジタル技術の活用が有効と言われているが、現場の人にとってはどうすればいいか分からないので、専門家からの意見を取り入れるなど、行政を含めて、サポートしていくことが必要と思われる。

●吉澤部会長

徳島県の祖谷エリアは、観光圏（「にし阿波～剣山・吉野川観光圏」）やDMO活動の先進事例（一般社団法人そらの郷（地域連携DMO））としてもよく取り上げられており、地域全体で頑張っている。

あえて秘境の部分で、古くからの日本的なものが残っているという切り口で、欧米、特に文化への理解が深いフランス人をターゲットとし、戦略的にアプローチしている。フランス人が多く集まることによって話題性が高まり、国内外から多くの観光客が訪れるようになるという展開である。

人材不足については、マッチングがうまくいっていないという意見であった。長期では難しくても短期であれば気持ちよく働ける人を見つけられる、こうしたマッチングを通じて、定着につながっていければと思う。

●齋藤委員

人の流れについては、私も3月に京都に行った時、約半数はインバウンドの観光客であり、流れが戻ってきているというイメージだったが、湯沢市の小安峡温泉ではまだ戻りきっていない。

ゴールデンウィークは、確かに温泉郷にはかなりの観光客が来ていたが、市内の街中では人が少なく、せっかく人が集まってきている地域があるので、もう少しその経済効果が広がるような、観光地からの流れを作っていければ良いと思う。

人手不足については、ある事業者さんから相談されたことがある。人手不足が深刻で、力のある人、男性であればということと言われたがなかなか確保できずにいた。先ほどのマッチングが重要であり、長期で働くことは難しいが短期間であっても、熱い思いを持っている事業者とやる気のある若者をマッチングさせることによって、人材不足の解消につながるような効果が生じるのではないかと思う。

●吉澤部会長

街中であっては、まだ人の流れが戻りきっていないこともあるので、そうであればこそ、経済効果を高めるような取組は重要であり、人材確保については、地域で働ききっかけづくりが定着にもつながっていくことかと思う。

●丑田委員

毎週、東京に行っているがホテルの値段がコロナ禍前より3倍くらい、5千円が2万円く

らいになっているところもあるなど、東京での旅行コストはかなり上昇しており、京都も同じような状況かと思う。

以前は、安価でかつ、おもてなしをするところが多かったが、適正に値上げをしていけるかという点が宿泊や体験プログラムの価格面で問われており、秋田県内もどこまで値上げできるかが重要であって、適正な値上げをすることが従業員の処遇改善にもつながる。

世界ではコロナ禍前に戻っており、マスクもほぼしていない状況であるので、こうした流れを踏まえて、何をすればいいか考えないといけない。

人手不足については、かなり以前から課題となっており、デジタル化の面で見ると、外国ではスマートロックで解除して部屋に入る、またはデバイスを活用して行きたいところへ行くなど、省力化の徹底と合わせて、体験コンテンツへ誘導するなどの仕組みを構築している施設もある。

また、交通においては、地方では公共交通機関も少ないので、例えば、外国の方が、レンタカーを借りて乳頭温泉に来て、青森県に抜けていくようなことができればいいが、できない方の場合は、アクセスが悪いところには行きづらい。タクシーでは、かなりの高額になってしまうので、ライドシェアの規制緩和も含めてどのように解決していくか、観光や交流面においては課題となってくると思われる。

●吉澤部会長

京都の話があったが、インバウンドが本格的に回復したときには、かつてのオーバーツーリズムの再燃がどうしても危惧される。秋田でもそうならないようにすることが大切である。

価格問題については、適正価格という話がでたが、秋田でも適正価格は強く意識したい。その上で他地域よりも割安感が出せれば、価格面での競争力が上がり、来ていただける可能性も高まる。

人手不足については、別府でも宿泊施設に限らず、タクシーもコロナ禍で退職した方が戻らないなど、様々な業種で影響が出ている。

次の議事に入る。観光産業の持続的な成長に向けた戦略ということで、「冬季誘客の推進」、「高付加価値化」、「デジタル技術の活用」、「若者定着・女性活躍の推進」の四つの柱を中心に、様々な施策の組み合わせとなっているが、この点について御意見いただきたい。

●佐々木委員

企業の副業、シェアワークについて、例えば、パートの仕事をしつつ、なかなか時間が取れないかもしれないが、他の企業で時間限定のシェアワークが可能であるような環境があって、企業同士のマッチングのようなものがあればいいのではないかと思う。

シェアワークのような考え方は、例えば、学校においても教師の過重労働が問題となっているので、部活動の地域移行を見据えた取組の一つとなり得る。企業や行政の側から発信していかないと従業員側からはなかなか手を上げることはできないし、大学生や専門学校生も参加できるような仕組みがあればいいと思う。

●吉澤部会長

観光振興における行政の役割は、「芽出し」、「後押し」、「橋渡し」の三つが特に重要。行政への信頼感が高いので、関係者間の橋渡しをする中で、好循環ができればいいと思う。

●齋藤委員

サービスの高付加価値化について、県の取組を横につなげるような形にすればいい。マラソンに例えると、マラソンをする方は、「食」にこだわりがあるので、大会開催時にうまくPRする場があれば、他県の方でも秋田にはすばらしい食材があることをPRできる。

また、イベントは有効な集客ツールとなりうるので、集客した後どうやってつなげていくか、効果的なPRが重要であると思う。

●吉澤部会長

様々な機会を捉えてPRする、連携して相乗効果を得るという視点は大事である。

●丑田委員

佐々木委員の意見にあったワークシェア、副業の流れはこれからの流れとして重要となってくると思う。

最近、シェアリングエコノミーという自分の得意なところを持ち寄って経済効果を出すようなサービスがIT業界では流行っていて、コロナ禍でも伸びている。例えば、副業でまち案内をして稼いでみるとか、空き物件の貸出や農家民宿で少し稼いでみるとか。生きがいとしての活動として、あるいは結果的にそれが本業になったりするなどのポテンシャルもある。

生活観光というキーワードで、日常生活のお裾分けが経済効果となったり、普通の観光地では体験できないものであったり、里山の暮らしを体験したいという欧米の方は結構いるのではないかな。

また、海外の富裕層の方で安心して泊まれるような高価格帯の施設が秋田には少なく、他県に流出しているようなところもあるので、何か下支えできるものがあればいいと思う。

最後に、SDGsやサステナブルのようなものは、成熟した旅行者が求めてくる場所があるので、旅行者が増えていくほど、地域にお金が落ちて里山が再生され、海の生態系が整っていく、働く方の幸福度が上がるというような循環が、日本に先駆けて実践するようなビジョンが描ければいいと思う。

●吉澤部会長

SDGsやサステナブル関連の取組は、やはり里山があって、1次、2次、3次産業がある秋田であればこそ説得力があると思う。地に足が着いたモデルが出てくるといいのではないかな。

デジタル技術の中で、最近話題となっているチャットGPTはどう考えるか。

●丑田委員

チャットGPTはまだAIの入口の技術であって文字情報しか処理できない。今後、破壊的な技術が控えており、この5年くらいの間に一気に押し寄せてくる。まずは使い倒しなが

ら、上手にどのように活用するかということを考えていく必要があると思う。

昨日の会議においても、より破壊的な技術が出てくると、既存の仕事が自動化されていくので、大きな変化が出てくる中であって、まさにローカルな里山であったり、人とのつながりであったり、溪流釣りをするとか、地元の人と触れ合って食べるようリアルな体験が、デジタル化に対して高付加価値となり得るのでそこに投資をするような話があった。デジタルをうまく使いつつ、一方でアナログな地域に目を向けることが必要である。

●吉澤部会長

観光産業の効率化については、デジタル技術を使いつつ、アナログの魅力を大事にするようなバランスが大事かと思う。

●齋藤委員

チャットGPTを活用することはハードルが高く、最近SNSの使い方などを習っているという方も多いと思う。いろいろな技術が出てきているが、そのスキルをどのように活用するか、絞って教えることがいいのではないか。

●吉澤部会長

次に、新秋田元気創造プラン戦略3の施策の推進に向けた提言に入る。目指す姿1から5までであるが、昨年度の会議では交通分野での協議時間が少ないということがあったので、本日は交通分野から御意見を伺いたい。

●齋藤委員

高速道路の整備について、便利になって往来がしやすくなった反面、地域が通過されてしまう問題が出てくるかと思う。高速道路が整備されることによって得られる経済効果と、失う効果などの統計があれば教えていただきたい。

□碓石道路課政策監

本県では全区間開通している訳ではないので、マイナス面の効果について特に統計としてまとまっているものはないが、東北管内では、福島県から新潟県までの磐越自動車道が整備されたことにより、途中の会津若松の東山温泉の宿泊客が減少し、その地域で観光振興を再考したという事例があることを承知している。

●齋藤委員

こうした弊害によってもたらされるマイナスの経済効果もあるので、今から対策等を講じて、上手に投資することによって、戦略を立てられることもあるのではないか。

●吉澤部会長

高速道路の整備によって観光客が減少した事例は過去にもある。まずはこうした現象が起こりうることを地元によく説明することが大事である。

その上で、道路の整備後も素通りされることなく、立ち寄ってもらうための魅力づくりが大切である。

●丑田委員

昨年度、地域交通については意見をしたので、航空路線について意見したい。県外との移動に係るコストは高いと感じており、台湾などの海外とのチャーター便の運航などによるインバウンド誘客も期待される中、海外から東北エリアへ直接移動できる手段の確保は重要なことである。

●佐々木委員

災害があった際に道路が陥没する事例がよくある。災害があった際には、他の道路があるなど、高速道路の整備に当たっては災害への対応も考慮しているのか。

□碓石道路課政策監

災害対応については、高速道路単独で対応しているわけではなく、高速道路と並行する道路も確保するダブルネットワークという考え方を持って整備しており、どちらかが不通となっても支障がないよう、また、観光客の方が孤立するようなことがないように、通年で誘客ができるよう整備を進めている。

●佐々木委員

よく理解できた。もっと地域の方も含め、外部の方によく周知していただきたい。例えば、昨年も自宅の近くで水害があり私も市民も不安に思っている。ダブルネットワークという考え方で整備することをもっと市民に説明していただきたいと思う。

●吉澤部会長

道路は観光客も等しく使用するが、やはり市民の安全安心が重要である。その上で、観光利用を考えていくことが必要である。

道路についていうと、最近はあまり聞かなくなったが、「日本風景街道」という取組がある。道路を移動手段としてばかりではなく、景観を楽しんだり、憩いや交流の場づくりを行うことで観光振興につなげる取組である。こうした点も意識しつつ、道路の整備を行ってほしい。

次に、スポーツの分野に入る。スポーツについては、スポーツを介しての交流人口・関係人口の拡大を進めて行くに当たってどういった体制が必要か、昨年度も議論になったところであるが、新たな視点や継続して取り組んだ方がいいなどの意見を伺いたい。

●佐々木委員

部活動の地域移行について、子ども達を指導する人は先生だけではなく、地域の中にでも多くいてほしいし、結構いると思う。例えば、元プロ選手が地域の中にもいるが、資格の問題があって指導できないということを聞いたことがある。資格について、もう少し取得までの

サポートができれば指導者の幅が広がり、子ども達の技術向上につながると思うので、取組を強化し、人材の掘り起こしも併せて実施していただきたい。

●齋藤委員

スポーツイベントの内容によって、ターゲットとする層は大きく変わる。イベントの中で、どのように食材や日本酒などの県産品をPRしていくかが重要であるし、次の購入につながると経済効果も出てくると思う。

●丑田委員

子どもの運動については、親の送迎が増えたりなどの社会環境の変化もあって、運動量が減少しているが、日々の暮らしの中で日常的にスポーツに取り組める視点が大事である。

私も引っ越してきて歩く量が随分減っているが、何か歩くことなどの日常的に運動することに対して、インセンティブのようなものがあればいいかと思った。

また、観光やスポーツの枠組みを超えてしまうが、例えば、ヨーロッパや北欧では、森を整備し、森の中で安全安心な環境において釣りや散歩できるようにすることで、スポーツの運動量が上がったり、観光客も増えたりしている。地元の人が活用して、観光客も増え、カーボンオフセットが災害対応につながったりすることもある。

昨年洪水があった際、五城目町の森林を秋田大学の先生が調査したが、森の保水力が弱まっている中で、流木によって詰まりを生じさせたりすると聞いた。

●吉澤部会長

インバウンドの中でも特に欧米の方は、日本に来て日常生活で行っているウォーキングを楽しんでいる。歩くことに抵抗がなく、ポジティブに考えている。日頃からちょっとした運動を地元の方や観光客が楽しめる環境づくりができるといいと思う。

次に、文化の分野に入る。昨年度、体験活動が大事であるような意見があったかと思うが、昨年度の意見も含め、御意見いただきたい。

●丑田委員

美術館などの県内にある文化関係の施設について、観光客が訪れる流れをどうやって作るか、また、価格の問題であるが、文化芸術施設の入場料が廉価すぎると感じており、例えば、サグラダ・ファミリアなどの事例と比べると、日本との価格差は5～10倍くらいある。

何が適正価格ということはケースバイケースであるが、価格を上げることに対応して、展示物の価値やサービスの向上は必要である。また、小正月行事の祭りなどでもそれに見合うVIP席を設け、価格を10倍にするなど、秋田の文化芸術分野はもっと自信を持って発信し、しっかり稼ぐことが必要である。

●吉澤部会長

五城目町のように普段の生活や暮らしに根差した文化的なものも大切な資源である。こうしたものも含めて、適正価格で提供していく必要がある。

●佐々木委員

ミルハスについて、開館記念公演などの企画やアーティストもたくさん来ており、周辺のにぎわいが作られているという良い印象を持っている。

また、近くの千秋公園では桜まつりなども開催しており、公園からの市内の眺めもいいし、散歩するには良い環境であるので、千秋公園を含めた活用を促す企画などあれば、もっと交流人口が拡大するのではないかと。

●吉澤部会長

ミルハス単体だけではなく、様々な施設と連携をすべきである。例えば、MICEでは、会議終了後に近くを観光していただくことなどにつなげていってもらいたい。

次に、食の分野に入る。食品事業者への支援という点も含め、御意見いただきたい。

●齋藤委員

食の素材について、素材単体よりも、どのように活用するかという視点が大事であるので、レシピや出来上がりのイメージなどもあれば買いやすい。

先日、酒粕について、台湾の方を連れていったときに関心を持っていた。美容に効果があるということで、韓国の方も興味を持っており、その活用方法をよく聞かれるので、レシピに加えて美容につながるシナリオなどがあればいいかと思う。

また、甘酒も好評で、酒粕を活用したチーズケーキのレシピなどもあるので、インバウンド誘客をターゲットとして、視覚情報として分かりやすく発信することも大切である。

●佐々木委員

発酵について、秋田が発酵文化の発祥の地であると思うので、もっとこの点をアピールして売り出すべきだと思う。また、サキホコレについても、あきたこまちとは違うブランド戦略、秋田出身の芸能人をたくさん活用するなどのプロモーションが必要であるかと思う。

小麦の高騰している状況下において、米粉を活用した商品をつくるチャンスであると思うし、事業者への支援を行ってほしい。

□黒澤食のあきた推進課長

サキホコレについては、農林水産部の秋田米ブランド推進室が所管しており、プロモーションも行っているため、伝えてまいりたい。

●丑田委員

先日、「ゴ・エ・ミオ」という食のレストランレポートに秋田県内の五つのレストランが選ばれて掲載されていた。にかほ市のレメデニカホや秋田市のスシュなど、素晴らしいレストランが増えてきており、全国や海外からも評価されている。こういった飲食店にスポットがあたり、刺激や学び合いが起きていくと、更に特色のある飲食店が増えていくのだろうと思う。

このように評価軸も以前とかなり変化しており、昔は、高級食材を使ってフォアグラのようなメニューがある飲食店がミシュランなどでも評価されていたが、その地域の食材や食文化を使うことや、資源循環型・サステナブルなどの視点も含めて評価されており、秋田でも意識しているレストランが増えてきている。

男鹿のある事業者は、クラフト酒に加えてラーメンやジンを作るなど、発酵を軸に食や宿泊も含めて展開していくという動きを行っており、こうした取組は今後も増えていくだろうと思う。五城目の酒蔵も酒蔵の拠点として発酵パークという会社を作り、日本酒と発酵文化によるまちづくりをしていこうとしている。

各地域の酒蔵や発酵業界の方々が投資していく動きがあるので、行政が支援することにより、こうした取組が増えていってほしい。

●吉澤部会長

観光に関するアンケートでは、食・温泉・自然は必ず旅行目的の上位にくるキーワードで、そういう意味では秋田には全てが揃っている。

別府には、例えば、温泉の蒸気を活用して蒸す、地獄蒸しというビジュアル的にも映える食べ方があるが、秋田の発酵についても、いかに分かりやすく伝えるかが重要であるのでその点を工夫していただきたい。

次に、観光分野に入る。皆様から御意見を伺いたい。

●齋藤委員

誘客プロモーションについて意見したい。行政では、観光資源なども含め、地域全体をバランス良く、いいとこ取りのような形で宣伝するところがあると思うが、なかなか地域の魅力が伝わらないとの意見を聞いたことがある。

ビジュアル的に秋田はこういう地域、例えば、雪と秋田など、行政では絞って発信することは難しいと思うが、情報発信の方法は重要なことだと思う。

●佐々木委員

知事が本日の審議会で言っていた「サバイバー秋田」は面白いと思った。少し遊びやコメディ要素を入れて売り出した方がインパクトがある。齋藤委員の意見のとおり、たくさん情報があることによって分散され、分かりづらくなっているかもしれない。

●丑田委員

私もいろいろなところを旅行するが、複数回行く場所は少数であってかなり難易度は高いと思う。観光と2拠点居住など、交流人口や関係人口などの分野ともつながっていくかと思うが、例えば、美食の都で有名となっているバスク地方には何度も行っており、世界にここにしかないようなブランドができるといい。

私も複数回行ってみたいところはどこか、どういった特徴があるかなどを考えていきたい。

●吉澤部会長

何度も行きたい地域に共通するイメージはどのようなものか。

●丑田委員

私の場合は人や地域とのつながりである。先ほどの生活観光の中でも、例えば、ベテランのマタギの方との交流はその人とでしか体験できない。再び行きたいと思えば、遠くであっても行くと思う。

●吉澤部会長

私も同感である。体験をどうやって観光に結び付けていくかということである。

また、齋藤委員の意見のとおり、マーケティングの部分でもあり、何を誰に向かって発信するか、ということが重要となってくる。

秋田にはまだインバウンド誘客が少ないが、一方で様々な国から人は来ているので、どういった層がどこから来ているかというところを分析し、戦略を立てた上でプロモーションを展開していくことが必要である。

(4) その他について

●吉澤部会長

議論が尽きないところだが、時間が迫ってきた。

委員の皆様には、次回に向けて、新たなアイデアや現状の取組の改善点などを考えておいていただければと思う。

□安達観光戦略課チームリーダー

本日は長時間にわたり御審議いただき感謝申し上げます。以上をもって、令和5年度第1回観光・交流部会を閉会する。